

風俗慣習／祭礼

【風俗慣習とは】

風俗慣習は、特定の地域や社会の中で慣れ認められた社会生活上のならわしやしきたりのことで、生産・生業や人生・儀礼に関する儀式、娯楽・競技に関する行事、小正月行事などの年中行事や祭礼(信仰)などがあります。

【奥州市における特徴】

奥州市では、祭礼(信仰)に関わる行事として、日高火防祭が県指定となっているほか、西沢目大名行列、やぶさめ、六日入白山神社献膳の儀、伊手熊野神社蘇民祭の4件を市の文化財に指定しています。

伊手熊野神社蘇民祭は、年頭の除災招福の行事の1つとしても注目されるもので、「岩手の蘇民祭」として黒石寺蘇民祭とともに国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されています。

ひ た か ひ ぶ せ ま つ り

日高火防祭

- ◆指定年月日 令和 5 年 11 月 21 日
- ◆伝承地 水沢地区
- ◆保持団体 日高神社火防祭保存会

日高火防祭は、歴史的には藩政時代に町宿場の火防祈願のために举行された祭礼です。現在の火防祭は 4 月最終土曜日に行われていますが、かつては旧正月 22 日の祭礼でした。

昭和 38 年 12 月に、その音曲である『火防祭の「屋台囃」』が民俗芸能（風流）として県指定無形民俗文化財に指定されていましたが、各町組が「町印」、「うちばやし」、「はやし屋台」を巡行させて「屋台囃」を奏でる行事が奥州市、金ヶ崎町、北上市の周辺地域に特徴的な、はやし屋台の祭りの典型的なものとして、風俗慣習（祭礼）の区分で新規指定されました。



発表の場所と時期 日高火防祭（水沢地域 4 月最終土曜日）、笛魂祭（日高神社・旧暦 1 月 22 日）、三曲合同演奏会（日高神社・4 月 22 日）

備考）県無民第 7 号『火防祭の「屋台囃」』（昭和 38 年 12 月 24 日指定）は、同日付で指定解除。屋台囃は「日高火防祭」に含まれる。

にしさわ めだいみょうぎょうれつ

西沢目大名行列

- ◆指定年月日 昭和 47 年 1 月 25 日
- ◆伝承地 江刺梁川地区
- ◆保持団体 西沢目大名行列保存会

江戸時代、仙台藩野手崎村の領主であった小梁川氏の仙台往復の行列の再現です。明治維新と同時に廃止されていましたが、明治 6 年（1873）に氏神松尾神社の村社昇格を祝う例大祭の神事芸能として復興し、西沢目地区の人々により催されてきました。

梵天長持・雲助や通行人（横切り女）による道中模様を再現しながら、歌や所作を交えて総勢 72 名の配役による行列が繰り広げられます。對と呼ばれる毛槍が、一般の大名行列の倍ほどの長さであることや、對・中槍・大傘・御箱などを投げ渡して交換する所作と掛け声に特徴があります。



発表の場所と時期 松尾神社例大祭（江刺地域 9 月 12 日）※近年は 5 ～ 7 年に一度の開催

やぶさめ

- ◆指定年月日 昭和 47 年 1 月 25 日
- ◆伝承地 江刺梁川地区
- ◆保持団体 梁川鎬馬保存会

江戸時代、野手崎村領主小梁川氏が、武技の練磨と士気の鼓舞のために実施していたものですが、明治維新と共に廃絶。明治 6 年（1873）に氏神松尾神社の村社昇格を祝う例大祭の神事芸能として復興し、現在まで継承されてきました。

まどがけ
的掛は、幅 4 m 長さ 200 m の馬場に 3～4 ヶ所ほどの架設し、舞手（騎手）は馬上から「セニヤーホー、ホーホー」の掛声で鎬矢を放ちます。この他、馬上から大きな布をなびかせながら馬を疾走させる布引、馬上で球を打ち合う打球、出演前後に行う参拝である小笠原流礼式があります。団体の使用名称は、小笠原流梁川流鎬馬です。

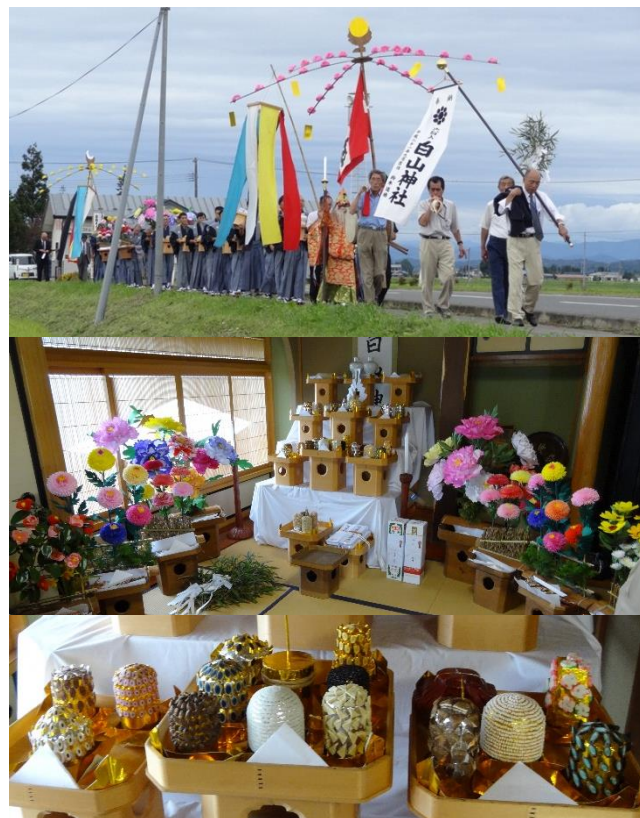


発表の場所と時期 松尾神社例大祭（江刺地域 9 月 12 日）※近年は 5～7 年に一度の開催

む い か い り は く さ ん じ ん じ ゃ け ん ぜ ん ぎ
六日入白山神社献膳の儀

- ◆指定年月日 昭和 52 年 8 月 1 日
- ◆伝承地 前沢白山地区
- ◆保持団体 白山神社総代会

神社由緒に「当神社の特殊神事として永代献膳の儀の行事あり。文久元年(1861)より絶えることなく云々」と記されている儀式です。献膳の内容に特徴があり、芒^{のぎ}の付いた稲粒、大豆、山椒の実などを円筒形・円錐・角錐の台枠に貼り付けて作った含意的料理に、白米・餅・お神酒と牡丹・菊・山百合・あやめ・椿の造花の献を添えます。それらを宿から六日入白山神社まで袴を着た奉仕人の行列で神前に奉納する他に類例のない行事です。その歴史性と内容の独創性は、まさに特異的であり、民俗的に貴重です。



発表の場所と時期 白山神社例大祭（前沢地域 9月第2土曜日）※本来は旧暦8月1日

い で く ま の じ ん じ ゃ そ み ん さい
伊手熊野神社蘇民祭

- ◆指定年月日 平成 9 年 8 月 1 日
- ◆伝承地 江刺伊手地区
- ◆保持団体 伊手熊野神社蘇民祭保存会

400 年以上の歴史を持つとされる奇祭です。旧正月を中心に裸の若者が「蘇民将来」と書かれた護符を奪い合う行事で、全国各地に残る蘇民将来伝承に基づく行事のなかでも、地域的特色が顕著なものです。

神事蘇民祭は、火たき上り〔雷木（祭りの前年に雷が落ちた木）を井桁に組み歳戸木をつくる→点火した歳戸木に厄年連が上り除夜祭の掛け声〕、蘇民袋奉納、鬼子上り〔大人に背負われた鬼子と共に本殿に参拝〕の後、蘇民袋の争奪戦が行われます。蘇民袋は、^{かつのき}將軍木でつくった護符（蘇民将来と書かれた小間木）を入れた麻袋のことで、木片や麻布片を入手するとその年は災厄を免れるといわれています。

令和 5 年から活動を休止しています。

発表の場所と時期 活動休止中 ※本来は熊野神社で旧暦正月 14 日に実施

備考）「岩手の蘇民祭」として一括で記録作製等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選定（平成 7 年 12 月 27 日）



民俗芸能／神楽

【神楽とは】

招魂・鎮魂の神祭に奏されてきた芸能で、神楽の語源は神座かむくらの約音とされています。宮中の御神楽と民間の神楽に大別され、民間では巫女、神主、山伏によって全国で伝承されてきました。岩手県では修験山伏が組織した山伏神楽が最も多く、次いで修験道廃止後農民達によって発達した県南地方の南部神楽(科白神楽)となっており、このほかに大乘神楽だいじょうかぐら、社風神楽みやぶりかぐら、太神楽だいかぐらなどがあります。

【奥州市における特徴】

奥州市の神楽の指定文化財保持団体は 32 団体(県 1、市 31)で、その内訳は、南部神楽(22)、山伏神楽(6)、獅子舞(2)、権現舞(1)、太神楽(1)です。

南部神楽は、明治以降に農民達の手によって発達した極めて娯楽性の高い神楽です。浄瑠璃や歌舞伎・郷土の伝説を素材に平易な科白と大胆な所作が特徴で、その多くが北上川西部に分布しています。旧一関藩領の三輪流山谷神楽みわりゅうやまやかぐらや達古袋神楽たっこたいかぐら等を祖とする神楽組が多くみられるほか、一部に修験道色が濃くみられる神楽組もあります。一方、北上川東部の旧江刺郡には、岳・大償だけ おおつくないの早池峰神楽を祖とする山伏神楽と瀬台野神楽を祖とする南部神楽が混在しているほか、太神楽も伝承されています。

かもさわ かぐら
鴨沢神楽

- ◆指定年月日 平成元年 8 月 1 日
- ◆伝承地 江刺広瀬地区
- ◆保持団体 鴨沢神楽保存会

早池峰神楽の保持団体の 1 つである大償神楽おおつぐないの流れを汲む山伏神楽いんべりゆうであり、「齋部流大償野口家伝鴨沢神楽」を巻物等による正式名称とします。大償神楽は、室町中期には成立していたと考えられていますが、江戸時代に入ると傍流が生まれ、一説では、文化文政期に野口善妙という法印（修験者）が「齋部流大償野口家流式」神楽を県内数箇所[※]に伝授。鴨沢神楽は、そのひとつである東和町の晴山神楽とその弟子である軽石神楽を学んで、明治 14 年（1881）に新山神社の奉納神楽として発足しました。大償神楽の芸風を示すもの、より古風なもの、より華やかになっているもの、独特なものなどがあり、特に女舞が見事です。鳥舞（鳥子舞とも呼ぶ）から大ヰ切り（権現舞）まで 36 幕、完全に継承する数少ない神楽であり、他に神輿渡御みこしとぎよに供奉する権現舞と子供による神楽シンガクが継承されています。

※権現舞や神輿の先祓いとして舞われる芸能

発表の場所と時期 活動休止中 ※以前は、火防の権現廻し門付(旧暦 2 月 1 日・2 日)、新山神社例大祭（3 月 9 日、9 月 9 日）

備考）記録作製等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選定（平成 9 年 12 月 4 日）



おうしゅうい さわきたしたはばかぐら

奥州胆沢北下巾神楽

- ◆指定年月日 昭和 35 年 3 月 28 日
- ◆伝承地 水沢水沢地区
- ◆保持団体 奥州胆沢北下巾神楽保存会

一般に修験道禁止令といわれる、明治 5 年（1872）
の太政官布達^{だじょうかんふたつ}に伴って解散した、上幅神楽団の舞手
であった千葉源五郎が中心となり明治 8 年（1875）
に創始した神楽です。その後、明治 21 年（1888）に
西磐井郡の達谷神楽^{たっこくかぐら}から、興隆しはじめていた南部

神楽を学び、瀬台野神楽^{せたいのかぐら}との交流で演目を充実させました。「胆沢型」と呼ばれるほど近隣に大きな影響を
与え、創始や演目の充実に関わった神楽は廃絶したものも含めて 9 団体（鹿合神楽、福原神楽、佐野神楽、
鶯沢神楽、鵜ノ木神楽、岩崎神楽、南下幅神楽、番匠神楽、毘沙門神楽）に及びます。

現在上演可能な演目は、御神楽、天の岩戸開き、三番叟^{さんばそう}、日本武尊^{やまとたける}、五大領^{ごだいりょう}、権現舞（稻荷田大権現）な
どとなっています。



発表の場所と時期 日高神社例祭（水沢地域 4 月 22 日）、駒形神社例祭（水沢地域 5 月 2 日）
神明社例祭（水沢地域 9 月 16 日）、権現廻し門付（1 月 2 日）

ふくわらかぐら
福原神楽

- ◆指定年月日 昭和 35 年 3 月 28 日
- ◆伝承地 水沢福原地区
- ◆保持団体 福原神楽

修験道廃止により廃絶した、胆沢小山の中沢神楽の舞手、本庄榮次郎が福原の菅原家に入嗣し、明治 22 年（1889）頃から近隣の子ども達に伝授したことに始まる神楽です。その後、北下巾神楽や瀬台野神楽との交流により南部神楽としての内容を充実させました。中でも能狂言等の題材から仕組んだ「道化」は独自の演目で、即興性にとんだ福原神楽

の特色として挙げられます。集落の鎮守はないため、駒形神社や日高神社の例祭で舞われたほか、じゅあんぜき寿安堰を開削した地域の先人・後藤寿庵を顕彰する寿庵祭など、頼まれればどこでも舞ったといえます。一時期活動が停滞しましたが復興し、現在上演可能な演目は、御神楽と五大領となっています。

- 発表の場所と時期 八幡神社祭礼（水沢地域 9 月）、後藤寿庵祭（水沢地域 9 月）
ふくわら祭（水沢地域 9 月 23 日）



お え な し だ か ぐ ら

狼ヶ志田神楽

- ◆指定年月日 昭和 35 年 11 月 1 日
- ◆伝承地 胆沢小山地区
- ◆保持団体 狼ヶ志田神楽保存会

江戸時代末期の文久元年（1861）に、胆沢小山の中沢神楽（廃絶）を伝授されて始まった南部神楽です。当初は、法印（修験者）によって伝えられた修験道色の濃い神楽だったと推測されますが、明治 25 年（1892）に、岩手県南から宮城県北地方を席捲しはじめていた南部神楽のひとつである達古袋神楽（一関市）

を伝授され、その流れの一翼を担い人々の熱狂的な支持を受けました。その後、胆沢・前沢・衣川地域の6団体（赤生津神楽、小安代神楽、二の台神楽、養ヶ森神楽、恩俗神楽、雲南田神楽）の創始や演目の充実に関与して今日に至ります。現在上演可能な演目は、御神楽、宝剣納、三番叟、岩戸入、田村二代記、羽衣、天の岩戸開、彦火出見尊、屋島合戦、一ノ谷合戦、五大龍、牛若丸弁慶五條の橋、宮参詣の場、安倍の保名、葛の葉子別れ、宝蔵破り、牛若丸秀衡一度対面の場、牛若丸秀衡二度対面の場、彦火出見尊出生の場となっています。

- 発表の場所と時期 きゅうり天王（水沢地域 7 月）、白山神社奉納（水沢地域 8 月）
神明神社奉納（胆沢地域 9 月）、八幡神社奉納（胆沢地域 9 月）
延年閣定期公演（宮城県）、他 県外公演多数



おんぞくかぐら
恩俗神楽

- ◆指定年月日 昭和 35 年 11 月 1 日
- ◆伝承地 胆沢小山地区
- ◆保持団体 恩俗神楽保存会

江戸時代末期に創始したと口伝される南部神楽です。明治初年代に十文字神楽の指導により再興し、明治 20 年代に達古袋神楽（一関市）の指導を受けて隆盛をみます。大正 8 年（1919）には、狼ヶ志田神楽の指導を得て内容を充実させましたが、昭和 60 年代以降、活動を休止しています。



発表の場所と時期 活動休止中 ※本来は、胆沢地域の新明神社で元旦に神楽奉納

ささもりかぐら
笹森神楽

- ◆指定年月日 昭和 35 年 11 月 1 日
- ◆伝承地 胆沢小山地区
- ◆保持団体 笹森神楽保存会

大正 9 年（1920）、前谷地神楽に学んだ、柴山神楽（廃絶）の佐々木伊治の指導を受けて創始した、南部神楽のひとつです。後年、佐々木伊治の後継者佐々木勇の指導により内容を充実させました。

演義本記載の地割舞と明神舞は、悪魔払いの祈禱舞で、法印（修験者）によって伝えられた、修験色の濃い演目です。現在上演可能な演目は、御神楽、明神舞の 2 演目となっています。



発表の場所と時期 駒形神社例祭（水沢地域 5 月 2 日）、胆掘神社例大祭（胆沢地域 9 月 13 日）など

ししあわせ か ぐ ら

鹿合神楽

- ◆指定年月日 昭和 35 年 11 月 1 日
- ◆伝承地 胆沢若柳地区
- ◆保持団体 鹿合神楽保存会

口伝によれば安政5年（1858）頃、法印（修験者）によって舞われていた中沢神楽（廃絶）を、本庄権太郎から伝授されて始まりましたが、その後中絶。明治40年（1907）、当時隆盛をきわめていた南部神楽の北下巾神楽を伝授されて再興したことから、系統的には修験道色の濃い南部神楽団体です。

現在上演可能な演目は御神楽のみですが、指導可能演目としては、岩戸開き、万治万三郎、一ノ谷の3演目があります。



発表の場所と時期 日高神社胆江神楽大会（水沢地域 8月）、山の神奉納（胆沢地域 9月19日）
他、地域行事での神事など

じゅうもん じ か ぐ ら
十文字神楽

- ◆指定年月日 昭和 35 年 11 月 1 日
- ◆伝承地 胆沢小山地区
- ◆保持団体 十文字神楽保存会

江戸時代末期、文久元年（1861）の創始とされますが、舞様など具体的なことがわかるのは、明治 11 年（1878）に一関の笹谷流深立目神楽を伝授された頃からで、南部神楽に列します。

以来、山神社の奉納神楽として活動していましたが、明治 20 年（1887）に庭元宅全焼により中絶を余儀なくされています。明治 43 年（1910）に一関の三輪流山谷神楽を伝授されて再興を果たしましたが、現在は平成 7 年（1995）の宝剣納めの上演を最後に活動休止しています。



発表の場所と時期 活動休止中 ※本来は、山神社の祭礼（胆沢地域 9月）

やまのかみしゃ

まえやちかぐら
前谷地神楽

- ◆指定年月日 昭和42年3月1日
- ◆伝承地 胆沢若柳地区
- ◆保持団体 胆沢若柳前谷地神楽保存会

十文字神楽の舞手であった米倉軍治が中心となり、明治16（1883）年に創始した南部神楽です。その後、明治20年（1887）に笹谷神楽（十文字神楽の師匠格）の指導を受けて内容を充実させました。戦中戦後に中断期間がありましたが、昭和34年（1959）に再興を果たし、今日に至ります。

現在上演可能な演目は、平成24年（2012）4月から指導を行っている若柳小学校児童（5・6年生）による「御神楽」となっています。



発表の場所と時期 若柳小学校運動会、地区の敬老会など
※本来は、於呂間志胆沢川神社例祭(胆沢地域 4月29日、9月12日)

みやぶりがきょう かぐら
社風長京神楽

- ◆指定年月日 昭和 47 年 1 月 25 日
- ◆伝承地 江刺梁川地区
- ◆保持団体 社風長京神楽保存会

伝書によれば、安政 3 年(1856)に、花巻市東和町字谷内の丹内山大権現に属する岳流山伏神楽を、長京の羽黒派修験常宝院賢秀方全が伝授されて始まりました。明治 5 年 (1872) の太政官布達による修験禁止令に伴い、師匠である^{だじょうかんふたつ}岳流山伏神楽が丹内山神社社風神楽に改編されると、長京神楽も八坂神社の神職による社風神楽に改編し、現在にいたります。社風神楽とは^{しゃけしんしよく}社家神職が組織した神楽のことです。

長京神楽には「式舞」など、演目の重要性を区別する呼び方存在しており、修験による岳流山伏神楽の影響を色濃く残していることがうかがえます。演目は、^{にわしずめ}庭静、^{さんばそう}老翁、三番叟、八幡、山神、磐屋戸の式六番が主流であり、^{したまい}下舞に権現舞が演じられます。



発表の場所と時期 氏神八坂神社大祭（江刺地域 6 月 15 日）、松尾神社例大祭（江刺地域 9 月 12 日）、五十瀬神社神輿渡（江刺地域 4 月）など

お が わ ら り ゆ う わ だ か ぐ ら
小川原流和田神楽

- ◆指定年月日 昭和 48 年 11 月 3 日
- ◆伝承地 江刺玉里地区
- ◆保持団体 小川原流和田神楽保存会

昭和 7 年（1932）に江刺田原の川内神楽から及川忠右衛門ほか 6 名を師匠に招き、座元和田屋敷佐藤卯三郎宅で、佐藤運次郎・及川武左衛門・菅野万平が世話人となり始まった南部神楽です。創始時の座元の屋号「和田屋敷」と、伝授書に記載されている真城村神道神楽会会長小川原房松（瀬台野神楽）の苗字をもらい、小川原流和田神楽と名付けられました。

現在上演可能な演目は、式六番（御神楽之舞、山の神舞、三番の舞、八幡の舞、道引の舞、岩戸開の舞）、裏式六番（鳥舞、荒拍子の舞、地割舞、五体領の舞、本岩戸の舞、宮鎮の舞）、信田の森舞、いちのたにふたぼくもき
の舞、高山掃部長者の舞、日本武尊の舞となっています。



発表の場所と時期 日高神社胆江神楽大会（水沢地域 8 月）など

かわうち かぐら
川内神楽

- ◆指定年月日 昭和 48 年 11 月 3 日
- ◆伝承地 江刺田原地区
- ◆保持団体 川内神楽保存会

川内神楽は、明治 39 年（1906）に鶯沢神楽の今野忠三郎師匠らの指導を受け、菊地庄右衛門・伊藤金蔵・及川忠右衛門らによって八幡神社の奉納神楽として創始された南部神楽です。昭和 52 年（1977）には、瀬台野神楽の再興、平成 3～12 年（1991～2000）には鶯沢神楽の再興に尽力するなど、いわゆる胆沢型と呼ばれる神楽団体の中興に貢献しました。

現在上演可能な演目は、式舞（御神楽、山の神舞、三番舞、道引舞、宮鎮舞、荒調子、五大領の舞、本岩戸舞）、仕組舞（篠田の森、西の宮、一の谷軍記、本八岐大蛇、万二万三郎、大和武尊、天の羽衣、火炎出見の尊、八岐大蛇（蘇民将来）、鞍馬山、三熊退治、高山掃部）、道化（婿取り、味こよしの鴻の池、魚つり、羅生門）となっています。



発表の場所と時期 八幡神社奉納（江刺地域 9 月 15 日）、胆江神楽大会（水沢地域 8 月）

だけりゅうがくまさわ かぐら

岳流学間沢神楽

- ◆指定年月日 昭和 48 年 11 月 3 日
- ◆伝承地 江刺米里地区
- ◆保持団体 岳流学間沢神楽保存会

岳流学間沢神楽は、重要無形民俗文化財に指定されている早池峰神楽の保持団体の一つである岳神楽の流れを汲む「山伏神楽」です。大正 4 年（1915）に花巻市東和町の白土神楽から伝授を受け、白鳩八幡宮奉納神楽として創始されました。

昭和 23 年（1948）以降、白土神楽および兄弟弟子の外山神楽（遠野市）との交流研鑽を続けてきましたが、平成 18 年頃から活動を休止しています。

発表の場所と時期 活動休止中

※本来は、春祈禱として権現舞の門付、白鳩八幡宮例祭（江刺地域 旧 9 月 15 日）

さ の む かい か ぐ ら

佐野向神楽

- ◆指定年月日 昭和 52 年 3 月 31 日
- ◆伝承地 江刺稲瀬地区
- ◆保持団体 佐野向神楽保存会

佐野向神楽は、嘉永 6 年（1853）に花巻市東和町の土沢神楽（岩手県無形民俗文化財）を伝授されて始まったもので、大償神楽系の山伏神楽です。その目的は、賭博や悪戯で風紀の乱れた地域内に、敬神思想を普及させて鎮めることにあったといえます。稲瀬地区には十数組の権現回しが伝承されていますが、その大半が「佐野向神楽」から伝授されて始まっており、地域における生活文化の一翼を担ってきました。

現在上演可能な演目は、下舞、権現舞、世剣舞、鳥舞、しがく舞、五色舞となっています。

- 発表の場所と時期 愛宕神社〔江刺地域 春分の日（3月23日）、秋分の日（9月23日）〕
胆江神楽大会（水沢地域 8月22日）、稲瀬文化芸能祭（江刺地域 11月）など



かわうち か ぐ ら
川内神楽

- ◆指定年月日 昭和 53 年 3 月 25 日
- ◆伝承地 衣川南股地区
- ◆保持団体 川内神楽保存会

口伝によれば、川内要害の利平ら数名が一関市の三輪流山谷神楽の政吉師匠を招き、安政元年（1854）に伝授された南部神楽です。明治末期、再び山谷神楽の指導を受けて内容を充実し、大正 5 年（1916）に平泉町の戸河内神楽、同じく大正 10 年（1921）頃には前沢の白鳥神楽の創始に関わりしました。

現在上演可能な演目は、^{みかぐら}三神楽、海幸山幸、一の谷、小敦盛、羽衣、牛若丸、屋島合戦、五條の橋、東下り、宝蔵破り、安倍の保名となっています。



発表の場所と時期 月山神社祭礼（衣川地域 10 月）、胆江神楽大会（水沢地域 8 月 22 日）
衣川神楽まつり（衣川地域 2 月）、岩手県南宮城県北神楽大会（4 月 29 日）など

せ たい の か ぐ ら

瀬台野神楽

- ◆指定年月日 昭和 56 年 3 月 30 日
- ◆伝承地 水沢真城地区
- ◆保持団体 瀬台野神楽保存会

羽黒派の修験道場であった日光院で、法印（修験者）の祈祷修行として伝えられていた神楽を、民間人が継承復活させたものです。中心となったのは、文久元年（1861）の日光院廃業前に法印神楽団に加わっていた、千葉栄左衛門らでした。明治初年代、

一関市萩荘の黒澤神楽、その後北下巾神楽とも交流し、南部神楽としての内容を充実させました。以来衰退・復活を繰り返しましたが、昭和 51 年（1976）に孫弟子にあたる江刺田原の川内神楽の指導により復活し、現在に至っています。現在上演できる演目は、御神楽舞、八幡舞、山の神舞、三葉舞、導引舞、鞍馬山となっています。なお、日光院廃業前に法印によって行われていた「春祈祷の 3 人立ちの獅子舞」については、瀬台野農事実行組合よって現在まで継承されています。



発表の場所と時期 熊野神社例祭（水沢地域 9 月 7 日）、八雲神社例祭（水沢地域）
秋葉神社例祭（水沢地域）、瀬台野地域の敬老会（9 月）

あ こう づ か ぐ ら

赤生津神楽

- ◆指定年月日 昭和 56 年 7 月 20 日
- ◆伝承地 前沢生母赤生津地区
- ◆保持団体 赤生津神楽会

口伝によれば、文政年間(1820 年代)、面影師民三郎と米蔵とが南部神楽を習得し、山神舞・八幡舞・翁舞等を踊ったのが始まりとされています。その後、明治中期に胆沢地域の狼ヶ志田神楽を伝授され、大正 10 年(1921)には、衣川地域の富田神楽(廃絶)から「渡り拍子」を教えられて今日に至っています。昭和 60 年代に入り、一時衰退しましたが、平成 19 年に再興しました。

台本等で伝承されてきた演目は 43 演目に及びますが、現在上演できるのは、御神楽のみとなっています。



発表の場所と時期 月山神社例祭（前沢地域 4 月 29 日）など

くまのかぐら
熊野神楽

- ◆指定年月日 昭和 56 年 7 月 20 日
- ◆伝承地 前沢古城地区
- ◆保持団体 熊野神楽保存会

熊野神楽は、農村の共同娯楽を目的に、明治 40 年（1907）ごろ、古城松ノ木沢の佐々木伊治（前谷地神楽の舞手で、胆沢小山の柴山神楽（廃絶）の創始者）を師匠に、小野寺栄治が初代庭元となって創始された南部神楽です。

もともとは名称を折居御本丸神楽といいましたが、昭和 32 年（1957）に中断後、昭和 52 年（1977）に再興するにあたり、鎮守熊野神社の名前をいただいて「熊野神楽」と改称しました。

演目には、御神楽、岩戸入、羽衣、楠正成、三番叟、岩戸開、牛若丸、海彦山彦がありましたが、平成 19 年頃から活動を休止しています。



発表の場所と時期 活動休止中 ※本来は、熊野神社例祭（前沢地域 9 月 9 日）

しろとりかぐら

白鳥神楽

- ◆指定年月日 昭和 56 年 7 月 20 日
- ◆伝承地 前沢白鳥地区
- ◆保持団体 白鳥神楽保存会

大正 9 年 (1920) に衣川南股の川内神楽を伝授されて始まった南部神楽で、当初は塔ヶ崎神楽と称していました。昭和初期に中絶状態に陥りましたが、昭和 40 年 (1965) に川内神楽と同系の平泉戸河内神楽の指導を得て再興。その際に、白鳥神楽と改称して現在に至っています。

現在上演できる演目は、御神楽、岩戸入れ、岩戸開きとなっています。



発表の場所と時期 白鳥神社例祭（前沢地域 9 月 6 日）、白鳥神社元日祭（前沢地域 1 月 1 日）など

なりおか だ か ぐ ら
成岡田神楽

- ◆指定年月日 昭和 56 年 7 月 20 日
- ◆伝承地 前沢生母地区
- ◆保持団体 成岡田神楽保存会

農村の共同娯楽を目的に、明治 43 年（1910）に磐井郡田河津（現一関市東山町）の竹沢神楽（廃絶）を伝授されて創始した南部神楽です。

昭和 38 年（1963）に鎌倉鶴岡八幡宮に奉納演舞し、昭和 43 年（1968）には、アジア友の会にまねかれて披露するなど、地域を代表する郷土芸能として活動を継続しています。

現在上演できる演目は、御神楽、三番叟、岩戸開、しょうわけしんわ あべのたいしやすな諸望分神話、阿部男司安奈の 5 演目となっています。



発表の場所と時期 久須志神社例祭（前沢地域 9 月 8 日）など

な ら い か ぐ ら

西風神楽

- ◆指定年月日 昭和 57 年 7 月 7 日
- ◆伝承地 胆沢若柳地区
- ◆保持団体 西風神楽保存会

西風神楽は、明治 12 年（1879）、佐々木十郎兵衛らが現一関市の三輪流山谷神楽を伝授されて創始した南部神楽で、名称を萱刈窪神楽かやかりくぼとしていました。明治 20 年（1887）頃に中絶しましたが、大正 9 年（1920）に再び山谷神楽の指導により再興。その踊組の野山田地区在住者が、昭和 4 年（1929）に「野山田神楽」を創始し、十文字神楽（胆沢）の高橋惣兵衛の

指導により内容を充実させました。（萱刈窪神楽は昭和 28 年（1953）に解散。） 昭和 50 年（1975）の国土調査に伴う字界変更を機に、名称を「西風神楽」と変更し現在に至ります。

演目には、式舞（御神楽・三番叟・山ノ神・岩戸入り・岩戸開き・八又の大蛇）、詠儀物（宝剣納・宝剣取）、繁長全曲などがあります。

発表の場所と時期 活動休止中



みなみしたはばくまの ごんげんまい

南下幅熊野権現舞

- ◆指定年月日 昭和 57 年 7 月 7 日
- ◆伝承地 胆沢南都田地区
- ◆保持団体 南下幅熊野権現舞

南下幅熊野権現舞は、江戸時代、南下幅村四国屋敷（石川氏）の氏神・熊野社に付属したものと伝えられています。この熊野社は、安永風土記御用書出にも記載があり、文化 9 年（1812）の棟札が伝わっていることから、権現舞も古くから舞われていたと考えられます。

中絶状態が長く続いていたところ、明治 30 年（1897）頃に大償神楽系の佐野向権現舞（江刺）を伝授されて再興しましたが、平成 年（ ）頃から、活動を休止しています。

発表の場所と時期 活動休止中 ※本来は、旧暦 1 月 15 日に、熊野神社境内での奉納や民家での門付けなどを実施

おおはらかぐら

大原神楽

- ◆指定年月日 平成 7 年 11 月 6 日
- ◆伝承地 衣川南股地区
- ◆保持団体 大原神楽保存会

大原神楽は、大正 10 年(1921)、現在の一関市山谷神楽の舞手の指導の下で創始されました。明治から昭和の始めにかけて、岩手県南から宮城県北にかけて、人々の熱狂的支持を受けて次々と生まれた南部神楽のひとつです。戦中戦後の中絶を克服し、昭和 42 年に再興を果たし、現在に至ります。

現在、演ずることが可能な演目は、三神楽、三番叟、岩戸入、岩戸開、御室焼、海幸山幸、田村一代、田村二代、翁舞、一の谷、小敦盛、屋嶋合戦となっています。



- 発表の場所と時期 薬師神社祭礼（衣川地域 10 月 31 日）、衣川神楽まつり（衣川地域 2 月）
胆江神楽大会（水沢地域 8 月）、岩手県南宮城県北神楽大会（5 月 3 日）

かわにししまい
川西獅子舞

- ◆指定年月日 平成 7 年 11 月 6 日
- ◆伝承地 衣川衣里地区
- ◆保持団体 川西獅子舞保存会

発表の場所と時期 活動休止中 ※本来は荒沢神社祭礼（衣川地域 10 月 28 日）

かわひがし か ぐ ら

川東神楽

- ◆指定年月日 平成 7 年 11 月 6 日
- ◆伝承地 衣川衣里地区
- ◆保持団体 川東神楽保存会

川東神楽は、大正 14 年(1925)に、同じ衣川地域の川内神楽と平泉の戸河内神楽の指導を受けて創始された南部神楽です。系譜的には、一関市の三輪流山谷神楽の孫弟子にあたります。

創始時から昭和 6 年(1931)頃までは、岩手県南から宮城県北を股にかけ、衣装の入った行李を背負って泊りがけで巡業したこともあったそうです。そ

の後、戦中戦後に自然消滅状態となりましたが、昭和 51 年(1976)に再興をはたし、現在に至っています。

上演可能な演目には、屋島合戦、一の谷、安宅の関、宝蔵破り、曾我兄弟、海幸・山幸のほか、衣川にまつわる創作神楽として、夕日の衣川、恋塚物語、夕霧物語、夏草の賦などがあります。



発表の場所と時期 神明神社祭礼（衣川地域 9 月）、衣川神楽まつり（衣川地域 2 月中旬）など

うたがきかぐら
歌書神楽

- ◆指定年月日 平成 17 年 4 月 1 日
- ◆伝承地 江刺広瀬地区
- ◆保持団体 歌書神楽踊組

伝書によると、江戸時代末期の嘉永5年(1852)に、花巻市東和町土沢から伝授されて始まった山伏神楽です。一時活動が衰退していましたが、地域の支援を得て復活を果たしました。

江刺の御嶽神社神輿渡御（またけじんじやみこしとぎょ）に際しては、権現様と子供たちの神楽が供奉するという古い形も保存継承されています。
シンガク祭



現在上演可能な演目は、塩汲み舞、三番舞となっています。

※権現舞や神輿の先祓いとして舞われる芸能

発表の場所と時期 広瀬芸能大会（江刺地域 11 月）、御嶽神社祭礼（江刺地域 9 月 16 日）など

おおつぐないいんべりゅうのぐちけでんくりゅうざわかぐら

大償齋部流野口家伝栗生沢神楽

- ◆指定年月日 平成 17 年 4 月 1 日
- ◆伝承地 江刺梁川地区
- ◆保持団体 大償流栗生沢神楽踊組

大償齋部流野口家伝栗生沢神楽（以下、栗生沢神楽）は、大正 13 年(1924)、白山神社奉納神楽として軽石の齋部流神楽（廃絶）を伝授されて始まったものです。

栗生沢神楽は、師匠である軽石神楽、その師匠の花巻市東和町晴山神楽が休止した際には、兄弟子である鴨沢神楽とともにその復活に寄与しましたが、現在は活動を休止しています。



発表の場所と時期 活動休止中

※本来は、白山神社大祭（江刺地域 3 月 15 日）、松尾神社大祭（江刺地域 9 月 12 日）、栗生沢集落火防祭（江刺地域 4 月 29 日）

は ら たい か ぐ ら

原体神楽

- ◆指定年月日 平成 17 年 4 月 1 日
- ◆伝承地 江刺田原地区
- ◆保持団体 原体神楽保存会

原体神楽は、大正 5 年（1916）に同じ江刺田原の川内神楽を伝授されて創始された南部神楽です。水沢の瀬台野神楽に連なる神楽団体であり、創始以来中絶することなく踊られてきており貴重なものです。

昭和 52 年には、田谷神楽（江刺愛宕）再興に指導者として関わっています。

現在上演可能な演目は、御神楽、岩戸開き、鞍馬山となっています。



発表の場所と時期 原体大山祇神社例大祭（江刺地域 9 月 13 日）、伊手熊野神社蘇民祭（江刺地域 1 月）など

うぐいすざわ か ぐ ら

鶯沢神楽

- ◆指定年月日 平成 17 年 9 月 30 日
- ◆伝承地 水沢羽田地区
- ◆保持団体 うぐいす沢神楽保存会

鶯沢神楽は、明治 26 年（1893）に瀬台野神楽を伝授されて創始した山の神神社の奉納神楽で、南部神楽のひとつです。師である瀬台野神楽の、最も充実した内容を伝授された神楽でしたが、戦中戦後と長く中絶状態にありました。平成 12 年（2000）に弟子神楽である川内神楽（江刺）の指導の下で再興を果たし、現在に至っています。現在上演可能な演目は多数で、次のとおりです。

式六番：御神楽、山之神舞、三葉舞（三番叟）、八幡舞、道引舞（岩戸入）、岩戸開ノ舞（天の岩戸）

神事舞：荒調子舞、宮鎮舞、五大領

仕組舞：日本武尊舞、日光権現、鞍馬山、高山掃部長者の舞、八岐大蛇退治の舞、篠田森子別之舞、一ノ谷嫩軍記の舞、彦炎出見尊舞

道化（狂言）：婿取り

創作神楽：アテルイ

附：今野忠治旧蔵「神楽本」5冊、「神楽面」2面

発表の場所と時期 山の神神社例祭〔水沢地域（初奉納 1 月 1 日、例祭 9 月 12 日）〕など



くろ た す け し し ま い

黒田助獅子舞

- ◆指定年月日 平成 17 年 9 月 30 日
- ◆伝承地 水沢羽田地区
- ◆保持団体 黒田助しし舞保存会

黒田助獅子舞の始まりは不明ですが、延享 3 年（1746）の銘がある桶太鼓が現存します。大正時代から戦後まで盛んに行われ、戦後の高度成長期に中断したものの、昭和 41 年（1966）に黒田助青年会により復興しました。毎年、2 月の第 1 日曜日に千養寺を出発して黒田助地区 55 戸の「権現まわし」を行っています。

権現まわしでは、悪魔になって家に入ろうとする獅子を、太刀を振りかざして阻止する悪魔祓いを行ないます。このとき、獅子は柄杓で水をかけて火防せのまじないも行い、さらには歯打ちをして家人の頭を噛み、一年の無病息災を祈ります。



附：獅子頭 1 点、太鼓 2 点

発表の場所と時期 2 月の第 1 日曜日（本来は旧暦 2 月 8 日）、婚礼時や上棟式など

な か た だ い か ぐ ら

中田太神楽

- ◆指定年月日 平成 24 年 10 月 31 日
- ◆伝承地 江刺梁川地区
- ◆保持団体 中田太神楽

中田太神楽は、旧和賀郡浮田村（現花巻市東和町）より、江刺郡梁川村中田集落（現江刺梁川）の菊井亀吉が伝授され、氏神八幡神社に、疫病退散と悪魔祓いを祈願し奉納したのが始まりと口伝されています。中田集落に天然痘が流行したため、砥谷沢の平野寅吉と高梨の菊池治惣兵エが発起人となって八幡神社に八坂神社を合祀したのが明治 22 年(1889)であり、中田太神楽の創始もこのころと推定されます。祈祷を目的とした「獅子舞」、五穀豊穡・家運繁盛を祈る「舞子」及び余興としての芸である「萬歳」を伝承しており、太神楽の特色をよく備えています。伊勢信仰代参の諸芸が奥州市に及んだことを示しており、地域の歴史や文化、民俗学的にも意義深い芸能です。

現在上演可能な演目は、小太鼓 2 基、横笛、手平鉦の囃子と唄で演じられる「獅子舞」、獅子舞に付随する「御宮舞、祝いの舞、目出度き舞、松の舞、恵比須舞」となっており、残念ながら余興の萬歳（漫才）は上演していません。

発表の場所と時期 松尾神社大祭奉納(江刺地域 9 月 12 日)



こ だ し ろ か ぐ ら

小田代神楽

- ◆指定年月日 平成 28 年 2 月 26 日
- ◆伝承地 江刺田原地区
- ◆保持団体 小田代神楽保存会

小田代神楽は明治 28 年（1895）に創始したとされる南部神楽です。その伝承経路は弟子神楽である根木町神楽（廃絶）の「神代神楽の巻」の記述により、菅原金之丞を師として瀬台野神楽（水沢）から伝えられた鶯沢神楽（水沢）の兄弟神楽と考えられます。

太平洋戦争後に衰退し、昭和 60 年頃からは地元の小学生に御神楽を教えながら命脈を保ってきましたが、平成 15 年（2003）に同系の和田神楽（江刺）に助力を請い、復活を果たしました。

現在上演可能な演目は、表と裏の式六番と八岐大蛇、三宝荒神、権現舞となっています。



発表の場所と時期 五十瀬神社例祭（江刺地域 9 月）、胆江神楽大会（水沢地域 8 月）など

民俗芸能／田楽・田植踊

【田楽・田植踊とは】

日本には稲の豊作を祈願予祝した芸能が多く、岩手県では田植踊・えんぶりのほか、春田打・百姓踊などがあります。北上川流域を中心に分布する田植踊は、田遊びが近世において風流化し、舞踊的要素を取り入れて娯楽性が高められたものとされていますが、小正月の予祝儀礼と結びついて信仰行事的な要素を持つものもあります。

【奥州市における特徴】

北上川西部(旧胆沢郡)には庭(土間)や戸外で踊る「庭田植」、北上川東部(旧江刺郡)には座敷で踊る「座敷田植」が分布しています。胆沢型庭田植踊は、仰々しい装束とカッコ(小太鼓を持つ)とヤッコ(鳥毛を持つ)の踊りが、エンブリスリ(旦那)と弥十郎の掛け合いで進行し、早乙女は登場しません。江刺地方の座敷田植は、農はだての後、小正月から3月頃まで招きに応じて各家の座敷で踊られたもので、弥十郎と早乙女の口上や踊りで進行します。豊作を祈願すると同時に、冬期間の大事な娯楽でもありました。

うわはばにわたう えおどり

上幅庭田植踊

- ◆指定年月日 昭和 35 年 3 月 28 日
- ◆伝承地 水沢佐倉河地区
- ◆保持団体 上幅庭田植踊保存会

上幅庭田植踊の発祥は不明ですが、口伝によれば、弘長 2 年（1262）、この庭田植えを高山掃部長者に見せたところ、「めでためでた」で踊って入ってくるのが良いということで、一番の折り紙をつけられ、それを誇りとして今まで伝承されてきたといえます。「胆沢型」に分類される予祝芸能で、田起こしに始まり、御倉への収納までを ^{やっこかつこ} 奴 鞆鼓 の踊りと ^{えぶりすり} 杵 摺 と ^{やじゅうろう} 弥十郎 の掛け合いで演じ、神々に豊作を印象付け約束させようとするものです。

現在上演可能な演目は、入り込み、朝はか、ひるし引き、つんばくら、米搗き節、小糠飛ばし、お蔵納め、お中入り、入れ違い節、鎌倉節、向い山、草刈節、西よ館、名取川、天竺節、夕暮節です。

- 発表の場所と時期 鎮守府八幡宮例大祭（水沢地域 9 月）、駒形神社新穀感謝祭（水沢地域）、市芸術文化発表会（水沢地域）



と どり た う え お どり
都鳥田植踊

- ◆指定年月日 昭和 35 年 11 月 1 日
- ◆伝承地 胆沢南都田地区
- ◆保持団体 都鳥田植踊保存会

都鳥田植踊は伝承によれば、天正 18 年（1590）、豊臣秀吉の奥州仕置きにより滅亡した葛西氏の家臣であった千田美濃が、上衣川の落合の館より都鳥に帰農して郷土となり、農民の労役を慰めるとともに豊作を予祝し、田の神を敬う舞として、自ら舞様を教えたものとされています。以来、300 年以上も踊り継がれてきた予祝芸能で、芸態は庭（畑）や戸外

で踊る「胆沢型」に分類される庭田植え踊りです。田起こしに始まり、御倉への収納までをやっこかつこ奴鞆鼓の踊りとえぶりすり杓摺やじゅうろうと弥十郎の掛け合いで演じ、神々に豊作を印象付け約束させようとするものです。



発表の場所と時期

活動休止中

で だ な た う え お どり

出店田植踊

- ◆指定年月日 昭和 48 年 12 月 7 日
- ◆伝承地 胆沢若柳地区
- ◆保持団体 出店田植踊保存会

出店田植踊は、文政 7 年(1824)に中西屋敷五郎七が、小山堀切の横屋田植踊の万吉師匠から伝授されて始まった「胆沢型」に分類される予祝芸能です。田起こしから御倉への収納までを、族子鞆鼓やっこかづこの踊りと歌読えんぶりすりと弥十郎の掛け合いで演じ、神々に豊作を印象付け約束させようとするものです。昭和 31 年(1956)頃は女田植踊りもあるほどでしたが、その後中絶。昭和 48 年(1973)に再興して現在に至ります。

上演可能な演目は、本田植踊（15 振り）、新田植踊（8 振り）、鞆鼓田植踊（8 振り）、中入に石段舞、三人大黒、竹の子舞、恵比寿舞です。

発表の場所と時期 小正月の門付け



もとまちざしきたうえおどり

元町座敷田植踊

- ◆指定年月日 昭和 52 年 3 月 31 日
- ◆伝承地 江刺玉里地区
- ◆保持団体 元町座敷田植踊保存会

元町座敷田植踊は、天正年間（1573～1591）に、羽山城主菊池氏が、家臣を宮城県金成地方に派遣して習得させ、踊らせ広めたものだといわれています。

豊作祈願の予祝芸能として、農始^{のうはだて}ての後、小正月から春 3 月頃まで、招きに応じて各家の座敷で踊られてきたもので、豊作を祈願するとともに、冬期間の大事な娯楽でもありました。

何度もの中絶と再興を経て継承されてきましたが、現在は活動休止中です。



発表の場所と時期 活動休止中

おおはら たう え おどり

大原田植踊り

- ◆指定年月日 平成 7 年 11 月 6 日
- ◆伝承地 衣川南股地区
- ◆保持団体 大原田植踊り保存会

大原田植踊は、伝承によれば、野崎薬師堂建立のきっかけとなった京都の大僧都明法院が、享保の凶作に際して、豊作祈願のために踊らせたのが始まりといえます。小正月前後に招かれて踊られた庭田植踊で、予祝芸能のひとつです。

明治に入ってから非常に盛んとなり、同地区の餅転や一関市厳美の小猪岡などにも伝授されたといえます。第二次世界大戦をはさんで中断し、昭和 53 年（1978）に青年会によって再興されましたが、平成 18 年頃から再び活動を休止しています。



発表の場所と時期 活動休止中

かるいしざしきたうえおどり

軽石座敷田植踊り

- ◆指定年月日 平成 17 年 4 月 1 日
- ◆伝承地 江刺広瀬地区
- ◆保持団体 軽石座敷田植踊り保存会

軽石座敷田植踊は、明治 23 年（1895）正月に平・日向・七日市・西風等の集落へ伝承されました。

昭和 20 年代前半に最盛期を向かえましたが、衰退、復活が繰り返されたため、昭和 52 年（1977）に軽石地区全体で再興されました。

明治時代から続く芸能を保存継承しようと、平成 9 年に保存会が結成され指定文化財となりましたが、少子化により地域で子ども（8 人）を確保することが難しく、現在は活動を休止しています。

演目には、道中囃子、入り込み、弥十郎囃子と踊り、手踊り、2 本扇踊り、銭太鼓、花笠、引きは、などがあります。



発表の場所と時期 活動休止中 ※広瀬地区の芸能発表会

民俗芸能／風流

【風流とは】

中世芸能のひとつである風流踊を源流に持つ民俗芸能で、華やかな衣装で着飾り、鉦や太鼓、笛などで囃し、歌い、おもに集団で踊るという特徴があります。

亡者慰霊のための念佛踊や盆踊・剣舞、奴踊、花笠踊など多くの民俗芸能・行事が含まれており、岩手県内には剣舞・鹿踊を代表に、駒踊・奴踊・虎踊・盆踊などがあります。盂蘭盆には先祖供養のため、神社の例大祭などでは五穀豊穡の祈願のために踊られるなど、地域社会の祈りと娯楽を併せ持った芸能です。

【奥州市における特徴】

指定文化財の保持団体として 37 団体(国 2、県 4、市 31)が認定されており、その内訳は、剣舞(17)・鹿踊(17)・囃子(1)・胴念仏(1)・奴踊(1)となっています。

剣舞は、反閤(へんばい)の呪術的性格と、念仏によって衆生を済度する浄土信仰的性格が結合した民俗芸能で、亡魂鎮めの念仏踊が風流化したものです。北上川西部には、異形の面を付けて刀を持って激しく踊る「念仏剣舞」、北上川東部には、少年たちを中心とする「ちご剣舞」が分布し、主として初盆の家・墓地・寺で踊られてきました。

鹿踊は、風流獅子踊の一種で、五穀豊穡・悪魔退散・先祖供養等の祈りが込められた民俗芸能です。宮城県北部から岩手県南部に分布する「太鼓踊系鹿踊」がみられ、身につけた太鼓を自ら打ちながらその囃子に合わせて踊り、八頭一組で踊ることから八ツ鹿踊りとも称されます。行山流(12)と金津流(5)があります。

重要無形民俗文化財 民俗芸能（風流）

おにけんばい

鬼剣舞

念仏剣舞は、主に県南部地方に分布している剣舞で、異形の面を付け刀を持って激しく踊るところから、北上地域では「鬼剣舞」といわれています。北上市2団体（岩崎鬼剣舞保存会、滑田鬼剣舞保存会）と奥州市2団体の計4団体を一括し、平成5年12月に重要無形民俗文化財「鬼剣舞」として指定され、令和4年11月にはユネスコ無形文化遺産に認定されました。

ほおのきざわねんぶつけんばい

（朴ノ木沢念仏剣舞）

無民第303号

- ◆指定年月日 平成5年12月13日
- ◆伝承地 胆沢小山地区
- ◆保持団体 朴ノ木沢念仏剣舞保存会

朴ノ木沢念仏剣舞は、平泉高館で戦死した源の義経主従の鎮魂のための踊り（高館勿怪^{たかだちもつけ}）が、明応3年（1494）に都鳥に伝えられ、寛政8年（1796）に都鳥の長八から、西堀切伊勢堂の平助に伝授されたものと伝わります。その後一時中絶するも、文久3年（1863）に朴ノ木沢惣五郎が再興し、現在に至ります。憤怒の形相の面をつけて踊る念仏剣舞は、特に岩手県中・南部に多く伝承されているもので、念仏歌とともに踊る亡魂鎮送の念仏踊の風流化したものです。主として初盆の家・墓地・寺で踊られてきた勇壮で力強い芸能であり、わが国の代表的民俗芸能のひとつとして重要です。



発表の場所と時期 伊勢堂神社（胆沢地域9月）、藤原まつり（平泉町5月）、北上みちのく芸能まつり（北上市8月）

おにけんばい

鬼剣舞

かわにしだいねんぶつけんばい

(川西大念仏剣舞)

無民第 304 号

- ◆指定年月日 平成 5 年 12 月 13 日
- ◆伝承地 衣川衣里地区
- ◆保持団体 川西大念仏剣舞保存会

川西大念仏剣舞に伝わる「剣舞由来」によると、前九年・後三年合戦で死んだ亡霊が現れて住民を脅かすので、藤原清衡が山王権現社にこもり、七日七晩の御参りをしました。すると、満願の日に一匹の猿が現れて亡者達と交流して彼らを済度し、猫間ヶ淵に魂を鎮めていったと記されています。この猿の舞を模したものが念仏剣舞で、以降、藤原清衡は亡魂供養のためにこの舞を踊らせたといいます。

口伝では、平泉の佐野剣舞（廃絶）を伝授されて始まったと伝えられており、中尊寺奥の院月山神社が鎮座する川西の地で舞われたものと伝えられています。現在は、中尊寺の施餓鬼法会で舞われています。



発表の場所と時期 中尊寺（平泉町）〔藤原まつり（5月・11月）、施餓鬼法会（8月）〕

ししおどり かなつりゅうつるはぎ ししおどり
鹿踊り（金津流鶴羽衣鹿踊）

- ◆指定年月日 昭和38年12月24日
- ◆伝承地 江刺稲瀬地区
- ◆保持団体 鶴羽衣鹿踊保存会

金津流鶴羽衣鹿踊は、文化11年（1814）に相去小野利源太から授与された巻物を伝承していますが、供養碑によれば文化5年（1808）には踊られていたことが明らかな太鼓踊系鹿踊りです。口伝によれば、慶長12年（1607）に七北田藤九郎から鶴羽衣初代万吉に伝授され、享保3年（1718）に三代万吉が藩境御番所の犬飼清蔵から伝授されたとも伝わります。

踊組としての相伝儀式に「四門くぐり」を継承し、長い伝統と豊かでダイナミックな技芸とを併せ持つ貴重な芸能です。現在上演可能な演目は、荒金（厄病除）、春駒（豊年踊り）、女鹿かくし、案山子踊り、十三、鉄砲踊りです。



- 発表の場所と時期 えさし藤原の郷定期公演（年2回）、江刺甚句まつり（5月）、江刺夏まつり（8月）、北上みちのく芸能まつり（北上市 8月）、花巻まつり（花巻市 9月）、護領神社例大祭（江刺地域 9月）、稲瀬芸能文化祭（稲瀬地区 11月）

え さ し し や な が わ か な つ り ゆ う し し お ど り

か な つ り ゆ う や な が わ し し お ど り

江刺市梁川金津流鹿踊（金津流梁川獅子躍）

- ◆指定年月日 昭和 53 年 4 月 4 日
- ◆伝承地 江刺梁川地区
- ◆保持団体 江刺市梁川金津流獅子踊保存会

宮城県志田郡松山金津次橋村から江刺郡石関村を経て、文政 11 年（1828）、栗生沢村の菊池太蔵らに伝えられた太鼓踊系鹿踊で、団体の使用名称は「金津流梁川獅子躍」です。

創始から途切れることなく伝承されており、市内の金津流軽石獅子躍、伊手獅子躍、野手崎獅子躍を始め、流祖である宮城県松山地区の金津流獅子踊の復活を指導しました。また、丹内獅子躍（花巻市）、浦浜獅子躍（大船渡）など多くの地域に指導・相伝しており、現在の金津流獅子躍の中心的な団体です。ダイナミックな踊方が特徴で、地元の松尾神社例祭の奉納の他、求めに応じて公演なども行っています。上演可能な演目は、礼庭、島霧、霧返し、雌獅子隠、案山子踊り、鉄砲踊り、土佐です。



付：金津流鹿踊本體巻及び金津流鹿踊伝授之目録

発表の場所と時期 松尾神社例祭（江刺地域 9 月 12 日）、えさし藤原の郷定期公演（年 2 回）など

きゅうでんししおどり

久田鹿踊

- ◆指定年月日 平成 15 年 4 月 30 日
- ◆伝承地 江刺梁川地区
- ◆保持団体 久田鹿踊 踊組

久田鹿踊は、慶長 4 年（1599）の秘伝書、享保 2 年（1717）の大旆^{たいはい}・享保 3 年（1718）の供養碑が伝来しており、奥州市で最も歴史のある鹿踊の団体です。

行山流の太鼓踊系鹿踊ではありますが、笛の囃子が伴うこと、「坊子^{ぼうず}」と呼ばれる少年の踊り手が鹿とともに踊ること、腰さしが鳥羽製で短いことの 3 点において、他の団体とは著しく異なっており、仙台八幡堂系踊から行山流鹿踊に引き継ぐ中間的な形態を示唆しているとされます。



- 発表の場所と時期 江刺甚句まつり（5 月）、江刺夏まつり（8 月）
北上みちのく芸能まつり（北上市 8 月）、えさし藤原の郷定期公演（年 2 回）

い と う り ゆ う ぎ ょ う ざ ん し し お どり

伊藤流行山鹿踊

- ◆指定年月日 昭和 35 年 3 月 28 日
- ◆伝承地 水沢羽田地区
- ◆保持団体 伊藤流行山鹿踊保存会

伊藤流行山鹿踊は、昭和 5 年（1930）に、東磐井郡田河津村（現一関市東山町）の田河津鹿踊を伝授されて創始されたものです。団体に伝わる巻物の一巻に「行山組」があり、元祖は本吉郡水戸邊村（現南三陸町）の伊藤伴内持遠となっていることから、名称に伊藤の名を冠しています。

盂蘭盆前後に先祖供養・新仏供養のために踊られたために七月踊の異名をもち、五穀豊穰を祈願して秋祭りの場でも踊られました。

上演可能な演目には、礼舞、二人狂、三人狂、鉄砲踊、案子踊、女鹿隠、鹿島、土佐、墓踊があります。

発表の場所と時期 日高火防祭（水沢地域 4 月 29 日）、花巻まつり（花巻市 9 月）
みちのく鹿踊大会（宮城県栗原市 6 月 22 日）、奥州市民芸術文化祭郷土芸能の祭典



おくのりゅうふじふもとぎょうざんししおどり

奥野流富士麓行山鹿踊

- ◆指定年月日 昭和 35 年 3 月 28 日
- ◆伝承地 水沢佐倉河地区
- ◆保持団体 奥野流富士麓行山鹿踊保存会

奥野流富士麓行山鹿踊は、明治時代前期に胆沢郡永栄村（現金ヶ崎町）から栃ノ木村（現水沢佐倉河）に伝授された太鼓踊系鹿踊りです。旧村名から栃ノ木鹿踊とも呼ばれました。

盂蘭盆や先祖供養、五穀豊穡を願い神社への奉納などで踊られてきました。一時期中断しましたが昭和 20 年代に千田豊之助によって再興され、昭和 28 年（1953）には、仙台の伊達家霊廟に踊りを奉納して、家紋入りの御杯を拝領しています。

上演可能な演目には、一の庭、二の庭、三の庭、参人狂、参人鹿島、女鹿隠、鉄砲踊、案山子踊があります。

発表の場所と時期 駒形神社例祭（水沢地域 5 月）、日高火防祭（水沢地域 4 月最終土曜日）、盛興院（胆沢地域 8 月）、常楽寺（水沢地域 8 月）、鎮守府八幡宮（水沢地域 9 月）、猿田彦神社（水沢地域 9 月）、花巻まつり（花巻市 9 月）、奥州市民芸術文化祭郷土芸能の祭典など



いちののねんぶつけんばい

市野々念佛剣舞

- ◆指定年月日 昭和 35 年 11 月 1 日
- ◆伝承地 胆沢若柳地区
- ◆保持団体 市野々念佛剣舞保存会

市野々念佛剣舞は、明治 10 年（1877）に衣川地域の
大平念仏剣舞を伝授されて創始した団体で、憤怒
の形相の面をつけて踊る念仏剣舞に分類されます。

剣舞の由来を、垂仁天皇が剣を抜いて四方を払っ
たところ怪異が静まったことと伝えており、旧盆時
に民家や墓地などで踊られたほか、年中行事として
市野々のお駒さまでの奉納がありました。

上演可能な演目は、先剣舞・刀引き・八人怒物・三人怒物・一人怒物・カッカタ怒物・引剣舞・モミ手です。



発表の場所と時期 氏神縁日、旧盆時の民家、墓地など

ぎょうざんりゅう と どりししおどり

行山流都鳥鹿踊

- ◆指定年月日 昭和 35 年 11 月 1 日
- ◆伝承地 胆沢南都田地区
- ◆保持団体 行山流都鳥鹿踊保存会

行山流都鳥鹿踊は、口伝によれば、寛政 5 年（1793）に、達谷窟（平泉）の中津川清左衛門から伝授されて始まったと伝わる麓行山流の太鼓踊系鹿踊です。伊勢神社境内に嘉永 2 年（1849）の供養碑があるほか、過去の踊組仲間宅から発見された巻物に文化 11 年（1814）とあることから、江戸時代後期に踊られていたことは明らかです。以来、今日まで絶えることなく踊られてきました。

現在上演可能な演目は、礼舞（一番庭、二番庭、三番庭）、山雀、唐金、八人狂い、鉄砲踊、案山子踊、引き鹿島、墓踊です。

- 発表の場所と時期 伊勢神社奉納（胆沢地域 9 月）、藤原まつり（平泉町 5 月、11 月）
北上みちのく芸能まつり（北上市 8 月）、花巻まつり（花巻市 9 月）



けしょうざかねんぶっけんばい

化粧坂念佛剣舞

- ◆指定年月日 昭和 35 年 11 月 1 日
- ◆伝承地 胆沢南都田地区
- ◆保持団体 化粧坂念佛剣舞保存会

化粧坂念佛剣舞は、都鳥村の長八が創始したと云われていますが、詳しいことはよく分かっていません。長八以前には、寛政年間（1789～1801）に「カッカタ甚兵衛」という上手な舞手がいて、その人が踊って以来定着したとも云われ、地域には文政 8 年（1825）の供養碑も残されています。

その踊りは勇壮で力強く、主に初盆の家・墓地・寺で踊られてきましたが、現在は活動を休止しています。



発表の場所と時期 活動休止中 ※本来は化粧坂薬師堂例大祭（胆沢地域 4 月）

みなみしたはばねんぶつけんばい

南下幅念佛剣舞

- ◆指定年月日 昭和 35 年 11 月 1 日
- ◆伝承地 胆沢南都田地区
- ◆保持団体 南下幅念佛剣舞保存会

口伝によれば寛政 3 年（1791）7 月、伝授書によれば文化 14 年（1817）に渡部甚四郎清時より卯太郎が伝授され始まったといわれています。地域には、嘉永 3 年（1850）の供養碑が残されています。明治 5 年（1872）には、今では重要無形民俗文化財でユネスコ無形遺産となっている岩崎鬼剣舞（北上）の再興に助力し、同 9 年（1876）には化粧坂念佛剣舞と交流して二庭ずつ伝授しあっています。

現在上演可能な演目は、一番庭、二番庭、三番庭、刀剣舞、八人怒物、三人怒物、一人怒物、（とっときもの・三方七巡り・膳舞・もぎりとり）・念仏回向・胴取（ごひゃらく）・寄せ太鼓・道太鼓、となっています。

発表の場所と時期 久須志神社例大祭（胆沢地域 9 月）、宝寿寺盂蘭盆供養（胆沢地域 8 月）、南都田地区夏祭り（南都田小学校 8 月）など



にっさとねんぶつけんばい
新里念佛剣舞

- ◆指定年月日 昭和 39 年 11 月 1 日
- ◆伝承地 胆沢若柳地区
- ◆保持団体 新里念佛剣舞保存会

新里念佛剣舞は、明治 10 年（1877）に化粧坂念佛剣舞より伝授されて創始した団体です。いかめしい顔つきの面をつけ、剣を激しく振りながら踊る勇壮な踊りが特徴です。伝授された当初の、平泉高館物怪独特のものと思われる、念仏を唱え踊り始めるといふ、古くからの形態を崩さずに伝えています。

新里念佛剣舞には、一番庭、二番庭、三番庭、四番庭、一人怒物、三人怒物、八人怒物など多くの演目があります。中でも扇子を高く構え勇壮的に入り込みする二番庭は、悪霊を鎮圧する呪法と、「南無阿弥陀仏」を唱える念仏信仰が結合した踊りを象徴しています。



発表の場所と時期 新山神社例祭（胆沢地域 9 月）、奥州市主催の郷土芸能まつりなど

ししあわせねんぶつけんばい

鹿合念佛剣舞

- ◆指定年月日 昭和44年12月23日
- ◆伝承地 胆沢若柳地区
- ◆保持団体 鹿合念佛剣舞保存会

昭和4年（1929）に、市野々念佛剣舞から伝授されて創始した団体で、衣川地域の太平念仏剣舞の孫団体にあたります。旧盆中に寺や民家、新盆供養などで踊られるほか、於呂閑志胆沢川神社の例大祭など、寺社や地域の諸式典や芸能まつりなどで公演を行っています。

上演可能な演目は、先剣舞・刀剣舞・引剣舞（遠念佛）・八人怒物・三人怒物・一人怒物（2演目）です。



発表の場所と時期 於呂閑志胆沢川神社例大祭（胆沢地域 9月）

おくやまぎょうざんりゅううち の め ししおどり

奥山行山流内ノ目鹿踊

- ◆指定年月日 昭和 48 年 11 月 3 日
- ◆伝承地 江刺玉里地区
- ◆保持団体 奥山行山流内ノ目鹿踊保存会

文政 2 年（1819）に、築館村（現栗原市）より伝承されましたが、ほどなく衰退。奥山行山流内ノ目鹿踊としては、明治 14（1881）年に伊手地ノ神鹿踊の宇平治の取持で、前田野村（現一関市）の鹿踊を伝授され、発足しました。

踊組の中心となる「中立」と呼ばれる鹿の流し（衣装）には、地ノ神鹿踊と同じく、行山流山口派の象徴である和歌が染められています。

戦中戦後に中絶したのち再興しましたが、平成 23 年から活動を休止しています。現在、活動再開に向けて取組中です。



発表の場所と時期 活動休止中

おくやまぎょうざんりゅうますざわししおどり

奥山行山流増沢鹿踊

- ◆指定年月日 昭和 48 年 11 月 3 日
- ◆伝承地 江刺岩谷堂
- ◆保持団体 奥山行山流増沢鹿踊保存会

奥山行山流増沢鹿踊は、文政 10 年（1827）8 月に、伊手村二渡の地ノ神鹿踊の吉右衛門師匠から伝授されて始まった太鼓踊系鹿踊です。以来、今日まで絶えることなく踊られてきました。

装束の前幕の左右に、大きく「行山」の文字が染め抜かれているのが特徴で、太鼓に巻く濃藍のシラベ隠しには、仙台伊達氏の家紋である九曜紋を染めています。

上演可能な演目は、礼庭（一人狂、二人狂、四人狂）、女鹿狂、案山子があります。

- 発表の場所と時期
- えさし藤原の郷定期公演（年 2 回）、江刺甚句まつり（江刺地域 5 月）
 - 江刺夏まつり（江刺地域 8 月）、新山神社祭（江刺地域 4 月：三年おき）
 - 花巻まつり（花巻市 9 月）、北上みちのく芸能まつり（北上市 8 月）



かなつりゅういでししおどり

金津流伊手獅子躍

- ◆指定年月日 昭和 48 年 11 月 3 日
- ◆伝承地 江刺伊手地区
- ◆保持団体 金津流伊手獅子躍保存会

金津流伊手獅子躍は、明治 36 年（1903）9 月、梁川村栗生沢の佐藤亀治より伊手村渡邊八百吉に伝授されて始まり、以来今日まで絶えることなく踊られてきた太鼓踊系鹿踊です。伝授された当時から三代までは、踊り手が曾木田地区で構成されていたため、曾木田獅子躍という名称で踊られていました。昭和 45 年（1970）に「金津流伊手獅子躍」に改称し、現在 5 代目が伝承しています。

盆には必ず地元の寺に出向き、先祖供養をするので、帰省客などからも大変喜ばれています。

上演可能な演目は、礼庭、島霧、霧返し、女獅子隠し、案山子おどり、鉄砲おどりです。

発表の場所と時期 えさし藤原の郷定期公演（年 2 回）、江刺甚句まつり（江刺地域 5 月）
江刺夏まつり（江刺地域 8 月）、高林寺 8 月 13 日）



はらたいけんばい

原躰剣舞

- ◆指定年月日 昭和 48 年 11 月 3 日
- ◆伝承地 江刺田原地区
- ◆保持団体 原躰剣舞保存会

原躰剣舞は、慶応元年（1865）に増沢剣舞を伝授されて創始した団体です。厳めしい面をつけて踊る念仏剣舞とは様相が異なり、「江刺型」とか「ちご剣舞」と分類される、子どもがメインとなる剣舞です。

信者と呼ばれる、まんじゅ笠をかぶった鉦たたき・ササラ摺りの女兒たち、提灯持ち、信坊子というひ

ょっとこ面を被る男児、亡者と呼ばれる剣舞踊り手の男児によって踊られます。念仏とともに踊る亡魂鎮送の念仏踊が風流化したもので、主に初盆の家・墓地・寺で踊られてきましたが、大正 6 年（1917）、宮沢賢治の長編詩によって、全国的に知られるようになりました。踊りは、囃子（太鼓と口唱歌）に合わせて庭入りし、輪踊りしたのちに役踊（安剣舞、卯平剣舞、太刀入剣舞）、その後、太鼓の囃子に合わせて退場するのが流れとなっています。



発表の場所と時期 田原地区夏祭り（江刺地域 8 月）、江刺夏まつり（江刺地域 8 月 15 日）など

ますざわけんばい

増沢剣舞

- ◆指定年月日 昭和 48 年 11 月 3 日
- ◆伝承地 江刺岩谷堂地区
- ◆保持団体 増沢剣舞保存会

増沢剣舞は、口伝によれば文政 10 年(1827)に伊手村地ノ神から、鹿踊とともに伝えられて創始した団体です。「江刺型」とか「ちご剣舞」と分類されている、子供が中心となる剣舞です。切り紙をぐるりと垂らしたまんじゅ笠をかぶる鉦たたき・ササラ摺りの女兒たち、切子燈籠、主坊子^{すほこ}というひょっこ面を被る男児などを特徴としています。団体が所持する嘉永2年

(1849)の「剣舞免許状」は、文字通り、踊組加入の許可書ですが、そこに萬松寺住職の花押が押されており、お寺が相伝にかかわっている貴重な資料となっています。慶應元年(1865)には原体剣舞の創始に関わり、初盆の家、墓地、寺などで踊られてきましたが、平成 18 年頃から活動を休止しています。



発表の場所と時期

活動中止中

に の だいねんぶつけんばい

二の台念佛剣舞

- ◆指定年月日 昭和 48 年 12 月 7 日
- ◆伝承地 胆沢小山地区
- ◆保持団体 二の台念佛剣舞保存会

二の台念佛剣舞は、明治 25 年（1892）に衣川の川西大念仏剣舞を伝授されて創始した団体です。創始以来、駒込剣舞と称していましたが、昭和 23 年（1948）に現在の名称に変更しました。

川西大念仏剣舞の唯一の弟子剣舞であり、演目には本剣舞、追い込み、猖則、三人怒物などがありましたが、昭和 61 年（1986）ころから活動を休止しています。



発表の場所と時期 活動休止中

おくやまぎょうじょうりゅうも ち た し おどり

奥山行上流餅田鹿踊

- ◆指定年月日 昭和 52 年 3 月 31 日
- ◆伝承地 江刺岩谷堂地区
- ◆保持団体 奥山行上流餅田鹿踊保存会

奥山行上流餅田鹿踊は、明治 44 年（1911）に江刺地域の鴨沢鹿踊を伝授されて創始した、行山流に分類される太鼓踊系鹿踊です。以来、今日まで絶えることなく踊られてきました。

装束の前幕にある井桁最上部に染められた五三桐の御紋は、大正 6 年（1917）に皇太子殿下、翌年に閑院宮載仁親王の御台覧を賜り、大正 8 年（1919）に宮内省より使用の許しを得たものです。

上演可能な演目は、二番踊、礼庭、女鹿隠し、鉄砲踊、案山子です。



- 発表の場所と時期 えさし藤原の郷定期公演（年 2 回）、江刺甚句まつり（江刺地域 5 月）
江刺夏まつり（江刺地域 8 月）、花巻まつり（花巻市 9 月）、依頼により初盆など

い け だ どう ね ん ぶ つ
池田胴念仏

- ◆指定年月日 昭和 53 年 3 月 25 日
- ◆伝承地 衣川衣里地区
- ◆保持団体 池田胴念仏保存会

発表の場所と時期 活動休止中

おおだいらねんぶつけんばい

大平念仏剣舞

- ◆指定年月日 昭和 53 年 3 月 25 日
- ◆伝承地 衣川北股地区
- ◆保持団体 大平念仏剣舞保存会

大平念仏剣舞は、文政 7 年（1824）銘の締め太鼓が伝わっており、この頃には踊られていたと考えられます。以来、上衣川の太平地区で伝承されてきたものであり、獅子舞による先踊があるという特徴は、他に類例がありません。伝統的地域社会の祈りと娯楽を併せ持つ芸能として貴重です。

上演可能な演目には、先剣舞、刀引き、引剣舞、3 人怒物、カッカタ怒物があります。



発表の場所と時期 北股食と芸能まつり（衣川地域 11 月頃）など

ぎょうざんりゅうく よ う づ か し し お どり

行山流供養塚鹿踊

- ◆指定年月日 昭和 57 年 7 月 7 日
- ◆伝承地 胆沢若柳地区
- ◆保持団体 行山流供養塚鹿踊保存会

行山流供養塚鹿踊は、口伝によれば、安永年間（1770 年代）、新里村稻荷の儀左衛門が、出稼ぎ先の達谷窟（平泉）で伝授され踊組を組織したことに始まります。以来、戦中戦後の中絶期間を耐え、昭和 50 年（1975）に行山流都鳥鹿踊の支援を受けて再興され、踊りが引き継がれてきました。

演目には、礼舞・一番庭・二番庭・山雀^{やまがら}・墓踊がありました。



発表の場所と時期 若柳庭払いまつり（胆沢地域 11 月）、全日本農はだてまつり（胆沢地域 2 月）

の や ま だ ね ん ぶ っ け ん ば い

野山田念佛剣舞

- ◆指定年月日 昭和 57 年 7 月 7 日
- ◆伝承地 胆沢若柳地区
- ◆保持団体 野山田念佛剣舞保存会

野山田念佛剣舞は、大正 6 年（1917）に市野々念佛剣舞を伝授されて創始した団体です。戦中戦後に中絶し、昭和 50 年（1975）に兄弟剣舞である鹿合念佛剣舞の指導を受けて復活しましたが、平成 13 年から活動を休止しています。

演目には、先剣舞・刀引き・引剣舞・八人怒物・三人怒物・一人怒物・カッカタ踊がありました。



発表の場所と時期 活動休止中

やなぎだねんぶつけんばい
柳田念佛剣舞

- ◆指定年月日 昭和 57 年 7 月 7 日
- ◆伝承地 胆沢南都田地区
- ◆保持団体 柳田念佛剣舞保存会

柳田念佛剣舞は、伝授書によれば明治 13 年(1880)に、金ヶ崎西根川目剣舞を伝授されて創始した団体です。明治末頃に中絶し、その後、再興と中絶を繰り返し、昭和 54 年(1979)に女剣舞として活動を再開しましたが、平成 18 年から活動を休止しています。

演目には、せんぶし先節、しんぶし新節、かたなけんばい刀剣舞がありました。



発表の場所と時期 活動休止中

かる い し さ つ ま や つ こ お ど り

軽石薩摩奴踊

- ◆指定年月日 昭和 58 年 3 月 31 日
- ◆伝承地 江刺広瀬地区
- ◆保持団体 軽石薩摩奴踊保存会

軽石薩摩奴踊は、明治 43 年(1910)、現北上市口内町草刈場屋敷菅野嘉吉より、広瀬村菊池高左衛門が「皆伝極意書」を伝授されて始まりました。同時に、口内庭元から軽石庭元の菊池藤治郎へも「軽石薩摩奴踊秘傳之書」が伝授されています。

基本的な構成は、囃子方（内役）の歌上げと小太鼓に、一奴、二奴、押奴は唐団扇を持ち、それぞれの役に毛槍を持つ加勢がつきます。

上演可能な演目は、一番庭、中庭、三番庭、相模甚句、賞詞です。



発表の場所と時期 音石神社祭典（江刺地域 9 月 17 日）、西光寺万灯供養（江刺地域 8 月 14 日）
広瀬地区芸能発表会（江刺地域 11 月）

おくやまぎょうざんりゅうかもさわししおどり

奥山行山流鴨沢鹿踊

- ◆指定年月日 昭和 61 年 4 月 25 日
- ◆伝承地 江刺広瀬地区
- ◆保持団体 奥山行山流鴨沢鹿踊保存会

奥山行山流鴨沢鹿踊は、伝授書によれば安永 6 年（1777）に東山大原又助から軽石の六郎治に伝えられた鹿踊が、嘉永 4 年（1851）に伝授されて創始した、行山流の太鼓踊系鹿踊です。中絶再興を繰り返しつつ、現在に至っています。なお、師匠鹿踊にあたる軽石の鹿踊は廃絶しており、現在同地域に伝承される鹿踊は、明治 23 年（1890）創始の金津流軽石獅子躍となっています。

上演可能な演目は、礼庭、二番庭、女鹿かくし、案山子踊り、鉄砲踊り、寺譽踊ですが、近年は主に礼庭、二番庭、寺譽踊となっています。

- 発表の場所と時期 えさし藤原の郷定期公演（年 2 回）、江刺甚句まつり（江刺地域 5 月）
江刺夏まつり（江刺地域 5 月）、新山神社例大祭など



おくやまじょうざんりゅううたがきししおどり

奥山上山流歌書獅子躍

- ◆指定年月日 昭和 61 年 4 月 25 日
- ◆伝承地 江刺広瀬地区
- ◆保持団体 奥山上山流歌書獅子躍保存会

奥山上山流歌書鹿踊は、伝授書によれば、年月日不明ながら、東山大原又助と倉澤伊三郎の二人の師匠から、歌書村の覚右衛門が伝授されて創始した行山流に分類される太鼓踊系鹿踊です。なお、伝授書には、安永 2 年（1773）に東山大原又助と倉澤伊三郎、軽石六郎治らが江戸の藩邸にて上覧を賜り、金子 50 両と紋所 6 種の御免を拝領したとの記載もあります。伝授した人物と同一人物であれば、その頃に創始したことが推定されます。

上演可能な演目には、一番（礼庭）、二番庭、三人狂、歌書雌獅子、山隠（やまかげ）、案山子、鉄砲踊り、岩くずし、綾踊りがあります。

- 発表の場所と時期 えさし藤原の郷定期公演（年 2 回）、江刺甚句まつり（江刺地域 5 月）
江刺夏まつり（江刺地域 5 月）、御嶽神社（江刺地域 9 月 16 日）



ぎょうざんりゅうつのかけししおどり

行山流角懸鹿躍

- ◆指定年月日 昭和 61 年 4 月 25 日
- ◆伝承地 江刺玉里地区
- ◆保持団体 行山流角懸鹿躍保存会

行山流角懸鹿躍は、文久 3 年(1863)に同じ江刺地域の地ノ神鹿踊を万平、久米蔵、与吉、孫太郎らに伝授されて創始した行山流の太鼓踊系鹿踊です。戦中戦後の中断を経て昭和 56 年（1981）1 月に再興し、以後今日まで踊られてきました。踊組の中心となる「中立」と呼ばれる鹿の流し（衣装）には、東山大原の山口屋敷を祖とする行山流山口派を象徴する和歌が染められています。

上演可能な演目は、礼庭（中立狂い、三人狂い、四人狂い、女鹿狂い、はねこみ、ひきはか）、役踊（案山子踊り、女鹿隠し、鉄砲踊り、三光の儀）となっています。

- 発表の場所と時期 えさし藤原の郷定期公演（年 2 回）、江刺甚句まつり（江刺地域 5 月）
江刺夏まつり（江刺地域 5 月）、平泉藤原まつり（平泉町 5 月、11 月）



おおばたひらねんぶっけんばい

大畑平念佛剣舞

◆指定年月日	平成元年 12 月 26 日
◆伝承地	胆沢小山地区
◆保持団体	大畑平念佛剣舞保存会

大畑平念佛剣舞は、明治 15 年（1882）に朴ノ木沢念仏剣舞の支部踊組として創始され、大正 10 年（1921）に女おなごけんばい剣舞として確立されました。第二次世界大戦中は、青年たちが戦地にあったため、朴ノ木沢念仏剣舞として踊ることが多かったといえます。戦後に中絶し、昭和 48-49 年（1973-1974）に再興。昭和 60 年（1985）に「大畑平念佛剣舞」として再出発し、現在に至っています。

上演可能な演目は、大念佛（胴取りの曲打ち） ・ 一番庭（本剣舞） ・ 二番庭（三人怒物） ・ 三番庭（一人怒物）です。



発表の場所と時期 大畑平夏まつり（胆沢地域 8 月）、神明神社例大祭（胆沢地域 9 月）ほか、小山公民館まつりなど

おくやまぎょうざんりゅうじのかみししおどり

奥山行山流地ノ神鹿踊

- ◆指定年月日 昭和 52 年 3 月 31 日
- ◆伝承地 江刺伊手地区
- ◆保持団体 奥山行山流地ノ神鹿踊保存会

奥山行山流地ノ神鹿踊は、伝授書(写)によれば、文政 4 年（1821）8 月、東山大原山口屋敷喜左衛門から、伊手村地ノ神屋敷円蔵等が伝授されて始まり、以来今日まで踊り続けられている行山流の太鼓踊系鹿踊です。

東山大原の山口屋敷を祖とするこの系統は「山口派」といわれ、踊組の中心となる「中立」と呼ばれる鹿の流し（衣装）には、その象徴である和歌が染められています。

現在上演可能な演目は、礼庭、女鹿とり、鉄砲踊です。



発表の場所と時期 えさし藤原の郷定期公演（年 2 回）、江刺甚句まつり（江刺地域 5 月）
江刺夏まつり（江刺地域 5 月）

あにわだねんぶっけんばい

兄和田念佛剣舞

- ◆指定年月日 平成 17 年 4 月 1 日
- ◆伝承地 江刺米里地区
- ◆保持団体 兄和田念佛剣舞保存会

兄和田念佛剣舞は、便宜的に「江刺型」とか「ちご剣舞」に分類されています。まんじゅ笠をかぶる鉦たたきの 2 人の女兒、切子燈籠、オソブキ(スボコ)というひょっとこ面をかぶる道化役の男性、菅笠をかぶった白衣の 2 組 4 人の胴取等を特徴としており、鉦たたき以外の舞手は、基本的に大人が演じます。

廃絶した奥山流羽衣念仏剣舞（江刺角掛）の「念仏剣舞由来一卷」によれば、兄和田念佛剣舞は、文政 8 年（1825）に渡部甚四郎から「七ヶ条目録の剣舞」を伝授されて創始しています。その後、中絶しますが、慶應元年（1865）に角懸の与右エ門らの指導で再興されました。

演目には礼庭（礼舞・神前（仏前）再拝躍・御神楽入躍）、片入躍（後踊・狂三人躍）、中庭（早念佛勿込躍・（後踊・狂二人躍）、太刀入躍（後踊・狂四人躍）があります。その内容・芸態は念佛剣舞形成期の古態を偲ばせるもので貴重なものです。

- 発表の場所と時期 米里地区運動会（江刺地域 6 月）、江刺夏祭り（江刺地域 8 月）、
麓山神社大祭（江刺地域 5 月）など



かもさわねんぶっけんばい

鴨沢念佛剣舞

- ◆指定年月日 平成 17 年 4 月 1 日
- ◆伝承地 江刺広瀬地区
- ◆保持団体 鴨沢念佛剣舞保存会

鴨沢念佛剣舞は、便宜的に「江刺型」とか「ちご剣舞」に分類されています。まんじゅ笠をかぶる鉦たたきの 2 人の女兒、切子燈籠、オソブキ(スボコ)というひょっとこ面をかぶる道化役の男性、菅笠をかぶった白衣の 2 組 4 人の胴取等を特徴としています。



鉦たたきと、ささらすり（少女 2 人）以外は大人の男性が踊っていましたが、昭和 51 年（1776）の再興から子供剣舞となっています。弘化元年（1844）銘の「念仏剣舞由来一卷」を伝えており、下衣川村佐藤城五と鴨沢村古堂佐藤準内の名があります。口伝でも、下衣川から伝授されたとされていることから、この頃に創始したものと考えられます。

現在上演可能な演目は、二番庭～めん棒踊、三番庭～太刀入踊です。その内容・芸態は、念仏剣舞形成期の古態を偲ばせるもので貴重なものです。

- 発表の場所と時期 広瀬地区郷土芸能発表会（江刺地域 11 月）、新山神社祭礼（江刺地域 9 月）
江刺夏まつり（江刺地域 8 月）

かるいしねんぶっけんばい

軽石念佛剣舞

- ◆指定年月日 平成 17 年 4 月 1 日
- ◆伝承地 江刺広瀬地区
- ◆保持団体 軽石念佛剣舞踊組

軽石念佛剣舞は、便宜的に「江刺型」とか「ちご剣舞」と分類されています。まんじゅ笠をかぶる鉦たたき・ささらすりの 2 人の女兒、切子燈籠、オソブキ(スボウズ)というひょっとこ面を被る道化役、菅笠をかぶり白衣の 2 組 4 人の胴取などが特徴です。伝授書に



よれば、大同 3 年（808）に、羽黒山修行中の権大僧都法印忠慶が 3 人の旅僧から剣舞の由来（七ヶ条目録）を授けられ、ひろめたものです。地域における創始は明らかではありませんが、宝暦年間（1751～1763）に内役（笛）で活躍した「儀右衛門」という人がいたと口伝えられています。演目の内容や芸態に念佛剣舞形成期の古態が偲ばれるもので、当初から子供剣舞であることも併せて貴重なものです。

演目には、一番庭、二番庭、三番庭（砂子沢剣舞）、四番庭（砂子沢剣舞）がありましたが、現在は活動を休止しています。

発表の場所と時期 活動休止中 ※本来は、音石神社例祭（江刺地域 9 月）

かなつりゅういしぜきししおどり

金津流石関獅子躍

- ◆指定年月日 平成 24 年 10 月 31 日
- ◆伝承地 江刺稲瀬地区
- ◆保持団体 金津流石関獅子躍

石関獅子躍は、最も古い伝書が安永 8 年（1779）のもので、「獅子躍本体之巻」と「獅子躍躍術者之巻」が、宮城郡國分松森村（現仙台市泉区松森）の源十郎から江刺郡石関村肝入の小原吉郎治に授けられています。文政 11 年（1828）に梁川村栗生澤の菊池太蔵らに相伝し

ており、現在の岩手県内にある金津流の鹿踊の祖といえます。昭和の前半から活動を中断していましたが平成 14 年に活動を再開。分家筋の団体（金津流野手崎獅子躍）から正当な金津流獅子躍を伝授され、平成 23 年 9 月に相伝四門之儀を執り行って 14 代として完全復活しました。相伝を受けるたびに建てられる供養碑も 8 基現存しており、岩手県の金津流獅子躍宗家として芸能の発生又は成立を示す重要な団体です。

礼庭、島霧、切り返し、雌獅子隠、案山子躍、鉄砲躍、土佐躍の、金津流獅子躍全 7 演目が上演可能です。

発表の場所と時期 えさし藤原の郷定期公演（年 2 回）、石関熊野神社（江刺地域 4 月 29 日）江刺甚句まつり（江刺地域 5 月）、江刺夏まつり（江刺地域 8 月）、石関石洞寺（江刺地域 8 月 13 日）、花巻宗青寺（花巻市 8 月）、花巻まつり（花巻市 9 月）、稲瀬文化祭（江刺地域 11 月）



かなつりゅうのてさきししおどり
金津流野手崎獅子躍

- ◆指定年月日 平成 24 年 10 月 31 日
- ◆伝承地 江刺梁川地区
- ◆保持団体 金津流野手崎獅子躍

金津流野手崎獅子躍は、梁川野手崎地区の青年会が昭和 46 年（1971）に金津流梁川獅子躍の庭元で、8 代中立であった平野重男に入門し、昭和 56 年（1981）に相伝を受けて独立した、金津流獅子躍の分派団体です。創始時期は新しいものの、正当な金津流獅子躍を伝授されていることに加え、岩手県内の金津流獅子躍

宗家である金津流石関獅子躍の復活を指導したことから、同団体と併せて文化財に指定されました。初盆の家や墓地、寺などでも踊っており、伝統的地域社会の祈りと娯楽を併せ持つものとしても重要です。上演可能な演目は、礼庭、島霧、切り返し、鉄砲踊、案山子踊、雌獅子隠し、土佐踊、の金津流獅子躍全 7 演目です。



- 発表の場所と時期 えさし藤原の郷定期公演（年 2 回）、江刺甚句まつり（江刺地域 5 月）、
金性寺奉納・祖霊供養（江刺地域 8 月）、江刺夏まつり（江刺地域 8 月）、
松尾神社例祭（江刺地域 9 月）、花巻まつり（花巻市 9 月）

民俗芸能／その他

【その他とは】

今までご紹介してきた、風俗慣習、神楽、田楽・田植踊、風流のいずれにもあてはまらない民俗芸能を「その他」として分類しています。

【奥州市における特徴】

奥州市では、江刺地域に伝承されている人形芝居と地芝居（農村歌舞伎）を、このカテゴリーに分類しました。

このうち、人形芝居は、岩手県内では北上市の水押・花巻市の倉沢・雫石町の安庭で伝承されていますが、近年中断することが増えており、貴重なものとなっています。

ひろ せ にんぎょうし ば いじょうら く ざ
広瀬人形芝居常楽座

- ◆指定年月日 平成 7 年 9 月 1 日
- ◆伝承地 江刺広瀬地区
- ◆保持団体 広瀬人形芝居常楽座

広瀬人形芝居は、秋田・岩手をはじめ東北地方に分布している「一人遣い・ハサミ式」の人形芝居です。人形の首の軸を右手の人差指と中指ではさみ、親指と小指を左右の腕の穴に入れて操ります。人形遣いが舞台下に隠れて姿を見せないため「蔭遣い」とも言われます。



秋田県の猿倉人形と同系統と思われますが、保存会の伝承では、広瀬軽石の後藤幸右衛門が明治 3 年（1870）に伊勢参りの帰途、常陸（水戸）の縫右衛門一座系の人形芝居（三人遣・義太夫節・明治初年代廃絶）を習得して帰郷し、明治 20 年代（1887-96）に始めたとされています。県内の人形芝居は継承が難しくなっており貴重な伝承団体です。

現在上演可能な演目には、三番叟、傾城阿波の鳴門、一の谷嫩軍記、吉原景色、西国順礼仇討ちがあります。

発表の場所と時期 広瀬地区芸能発表会（11 月）など

かるいし かぶさ なかむらざ
軽石歌舞伎「中村座」

- ◆指定年月日 平成 17 年 4 月 1 日
- ◆伝承地 江刺広瀬地区
- ◆保持団体 軽石歌舞伎中村座

軽石歌舞伎「中村座」は、明治 10 年代（1877-86）に現花巻市東和町の倉沢歌舞伎の師匠を招いて伝授され、創始したものです。はじめは大人歌舞伎で、明治 30 年代（1897-1906）まで好評を博しました。大正 11 年（1921）に「子供歌舞伎」として再興され、人気を博すも、戦争により中絶。昭和 20 年代

（1945-54）に倉沢歌舞伎の指導を得て再興しますが、また中絶してしまいます。昭和 52 年（1977）の広瀬地区芸能発表会開催を契機に再興され、平成 9 年（1997）に後継者育成等を主活動とする「えさし軽石歌舞伎保存会」が設立され活動していましたが、平成 19 年（2007）から活動を休止しています。

演目には、仮名手本忠臣蔵（三段目、五段目、七段目）、菅原伝授手習鑑（車引きの場）、白波五人男（青砥縞花紅彩画稲瀬川勢揃の場）、勧進帳（一部分）、志賀山三番叟などがあります。

発表の場所と時期 活動休止中

